

【役者陣】



久保井研



加藤野奈



重村大介



藤森 謙



山本 隆彦



工藤 梨子



湯川 たくし



湯川 たくし



藤井 健記



藤森 謙



愛



山本 隆彦



山本 隆彦



工藤 梨子



湯川 たくし



湯川 たくし

# 作=唐十郎 演出=久保井研+唐十郎

## 【登場人物】

散里おひめ…スタントマン事務所(ドタンバ)に所属する。現在、やつときたスタントの仕事は、病気になるまで、(ため息占い)を努める

チバちゃん…(ドタンバ)の社長で、頼りがいがある

二風谷ケン…(ドタンバ)の唯一、若き星。北の国旭川の“字近文”という町の出で、今は、自衛隊員月寒の帰りを待つ。人は時折、こう呼ぶ。“ホルケウ(狼)”とも

月寒七々雄…北の“鷹栖町”の出身で、自衛隊員でもあり、熱砂の国より帰る。幼少時より二風谷とは仲よく

月寒 牙…七々雄の姉で、帰国後の弟のピンチを助けるために奔走する。故郷の店(マリゴール)の華

匠…七々雄の上官であり、帰国後、脱退。熱砂のムサンナ州を抜けてきた現実主義者であるが策を弄して、自らを(鉛の兵士)に堕とす

荒巻シャケ…(短ジャケ)とも呼ばれるスタントマンで、いつも塩につかっている

ジャコマン…(ドタンバ)に仕事を与える大きな事務所の代表で、元スタントマンで力が強い。やさしくした匠を拾う

散面…ジャコマンの部下だが、時々、上司をバカ呼ばわりする

洞屋 鈴子…下水口広場で、(洞屋)の店をもち、人の指紋ばかりを集め、ハーブの女王の気になる。“指紋買い”とも陰口たたかれる

あやこ…鈴子の養女で、店の指紋をあやし、縫とりする

小手屋…あやこを餌にするチンピラで、鏡でズボンのアイロンかけさせようとする

髪長い男…夢に出る牙の代りの兵士

幽霊部隊の影…旭川にも出ると言われる旧第七師団の気配と段ボールの人影

弾き手・小谷…橋の上に入れた墨師の娘。牙の店(マリゴール)に一度拾われ、七々雄、二風谷との絆はあつた、別名“シチカツ(鷹)”。今は爪のネール商いをする

コトバだけの妻ちゃん・ブツチョコ…星のような、二風谷屋号の育て妻

# 株式会社 コンパス

映像制作承ります。

(企業 VTR、舞台映像など)

<http://www.compass-co.net>

IAC Group IACグループ



株式会社インター・アート・コミティーズ

(株)IACドラッグストアグループ

(株)フアーストビジョン

(株)小梅

(株)コンパスキャリア

人材紹介・派遣事業

フードサービス事業 (レストラン・給食)

エンタテインメント事業 (音楽関連)

<https://www.interart.co.jp>

# 舞台が開く心の扉、観客の内に灯る電飾。唐十郎体験の四十年。

松岡和子

唐十郎の芝居を見ているさなか、幾度となく思うことがある——時間よ、止まれ、いまの言葉をもう一度聞かせて！  
扇田昭彦著『唐十郎の劇世界』を読んでいるあいだも、唐の言葉を聞きたいという思いがふつふつと湧いてきて、手近にあった二冊を手にとった。あるわあるわ、意識を発情させ、鮮やかなイメージを躍動させる喚起力に富んだ言葉、さまざま役者の声となつてはしげ飛びそうな弾力のある言葉の教々。

たとえば、「ラマダンと呼ばれる断食月の季節が来て、七々雄さんは、ムサンナ州の小さな村に泊まっていた。断食月の満月は、たわたとふくらみ、それが川に、砕けたガラスに、給水タンクの水溜まりに、撥ねて揺れたと言いました。」

これは二〇〇五年春に唐の主宰する劇団唐組が上演した『鉛の兵隊』からの引用である。サマワに派遣された自衛隊員→その身代わり→スタントマン、という連想が底流となつた劇構成の卓抜さもさることながら、雅俗、詩情、ナンセンスが混淆する文体には惚れぼれする。

この年、唐は、前年発表した『泥人魚』で紀伊国屋演劇賞、鶴屋南北戯曲賞、読売文学賞(戯曲部門)を受賞している。一九六三年に劇団状況劇場を旗揚げし、劇作家・演出家・役者としてデビューして以来四十年以上経つ現在もなお、彼の想像力のマグマはたぎり立っているのだ。

二〇〇七年「東京人」——扇田昭彦著「唐十郎の劇世界」

——松岡和子・評より抜粋

## 【物語】

幼き日、姉・牙と二風谷と共に故郷・鷹栖で見た、死の大佐・一木清直率いる旭川第七師団の幽霊部隊。今なお、その影に引きずられるかのように、自衛官になった月寒七々雄は、まだ戦禍の残るムサンナ州へと発つのだつた。そんな七々雄の身を守るうと、牙は二風谷にある依頼を申し出る。どうかでいつか「弟にすり替わつて」——。

かつて、路頭に迷う祖母と幼い自分を救つてくれた月寒一家のため、なんとかその依頼に応えるべく、スタント事務所(ドタンバ)に二風谷はいた。その二風谷のもとを、ムサンナ州での任期を終えた七々雄が訪れるのだが……。

長く垂らしたコートの袖に隠された傷痕。ドラム缶の上で踊る、満月を映した夜露。その鮮やかにきらめく満月のかけらをつまんだ七々雄の指先からは、指紋が失われていたのである。焼けて消えた指紋を取り戻すため、二風谷の指は、果たせなかつた牙からの依頼「七々雄のスタント」を今再び誓う。

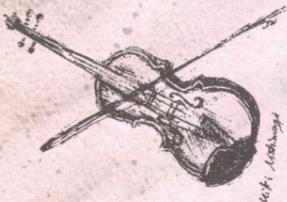
「暗い渦の底の涯。人はそこをのぞくまい、たどるまいと目閉じ、耳ふさぐのが、常、なりわい……が、あの男ばかりは、その渦を逆からたどり、筋を外れて、歩いてる。」

死んだ恋人・ララを今でも追い求める伝説のスタントマン・荒巻シャケの命懸けのスタント、入れ墨師の娘・小谷の奏でる弦音響く中、消えた指紋の渦探し、独りはぐれた鉛の兵隊が、止まつた砂時計に手を掛ける。

# 隊の兵隊 鉛の



唐組・第77回公演



Atsuki, Aoshima